

[最近のトピックス]

顎変形症外来の設立

松沢 史宏

北海道医療大学歯学部口腔講座・機能発育学系歯科矯正学分野

歯科矯正科外来には歯の不正咬合に悩む患者以外に、矯正歯科治療単独では治療できない骨格からの不正咬合、すなわち顎変形症を主訴に来院する患者も数多くみられた。顎変形症とは、上顎または下顎あるいはその両方の大きさや形、位置などの異常によって、顔面の変形と、咬合の異常を起こしている状態であり、症状は患者によって千差万別である。

2014年5月より、あいの里北海道医療大学病院にて顎変形症専門の外来が設立された。顎変形症の患者は、検査・診断、術前矯正治療、顎矯正手術、術後矯正治療の順に治療を行っていくのが一般的である。従来、検査はX線規格写真、パノラマX線写真、顔面写真、口腔内写真、平行模型で行っていたが、近年、X線CTと3Dスキャンの進化より、術前患者より得た3次元データから仮想患者モデル (Fig. 1) を生成し、手術シミュレーション (Fig. 2) を施行することにより、より精密なトリートメントゴールを3次元で作製し、矯正治療の目標を明確に設定できるようになった。顎矯正手術では、サージカルガイドを3Dプリンターで作製し、シミュレーションに基づいた手術を行うことに成功した。また、4月から、医療保険の改正により顎変形症患者にも矯正用インプラントの植立が可能となり、今まで不可能とされていた歯の遠心移動や固定源の強化も可能となり、より理想的な術前矯正治療を行えるようになった。

あいの里北海道医療大学顎変形症外来では、一般的な歯科矯正治療での対応が難しいと考えられる重度の顎変形症患者に対し、X線CTと3Dスキャンによる三次元診断を最初に行うことで、治療目標を明確に設定することが出来た。



Fig. 1: 仮想患者モデル

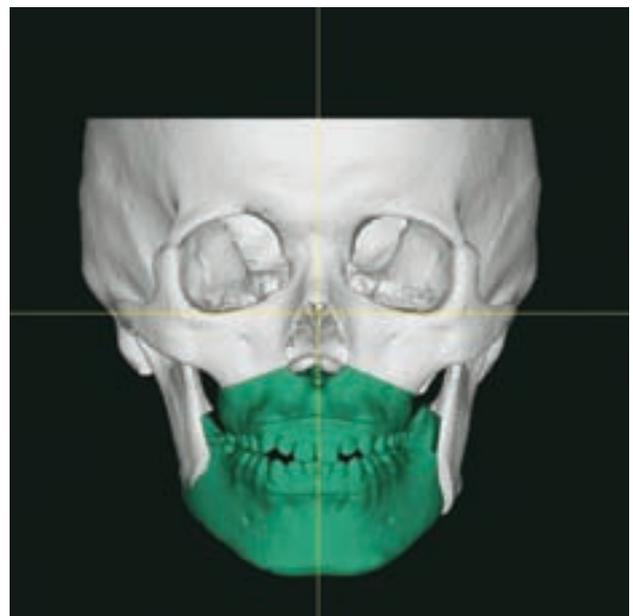


Fig. 2: 手術シミュレーション